

平成28年度 広島県特別支援学校教育研究会 第1分科会

重度・重複障害のある幼児児童生徒の発達段階に応じた自立活動の改善・充実

～肢体不自由(運動障害)のある生徒等のアセスメントの活用を通して～
指導助言者 川口 敷巳江 (県立教育センター特別支援教育・教育相談部 指導主幹)

テーマ 下山 真弓 (広島県立広島南特別支援学校 教諭)
サブテーマ 久保真喜子 (広島県立広島中央特別支援学校 部主幹)
研究スタッフ 刺田 昭史 (広島県立広島中央特別支援学校 教諭)
藤田 恵理 (広島県立尾道特別支援学校 教諭)
河本 藍沙 (広島県立広島特別支援学校 教諭)
藤原 由佳 (広島県立福山特別支援学校 教諭)
柳田 愛子 (広島県立西条特別支援学校 教諭)
井上 夢美 (広島県立三原特別支援学校 教諭)
金久 詩織 (広島県立呉南特別支援学校 教諭)
阿津地 一彦 (広島市立広島特別支援学校 教諭)

昨年度の研究

【研究仮説】
ビデオによる授業分析を行い、複数の視点で目標設定・指導方法・評価を協議することで、授業改善が進み、児童生徒の表現力がさらに向上するだろう。

コミュニケーションに関するアセスメントチェックリスト → フェイスシート → ビデオ分析

【研究のまとめ】
○ ビデオによる授業分析を複数で協議した結果、児童生徒との関わり方を客観視することができ、授業改善が進んだ。さらに、教員の児童生徒に対する手立てが改善し、表現する力が向上した。
△ ビデオを見て協議する際の視点を決めておく必要がある。

研究を進めるにあたって

ビデオを見て協議する視点が課題 → 重度・重複障害のある幼児児童生徒の実態は幅広い → 発達段階に応じた姿勢・運動に関する視点を踏まえて協議する → 重度・重複障害のある幼児児童生徒の自立活動の指導の充実を図りたい

「肢体不自由(運動障害)のある生徒等のためのアセスメント」の活用
・「姿勢」「健康状態」「運動」「認知・コミュニケーション」の四つの観点で構成
ビデオ分析
・発達段階に応じた学習姿勢・運動に視点を置き、課題を明らかにして授業改善を行う

研究仮説

障害の実態や発達段階に応じた姿勢・運動の観点を踏まえて目標・指導方法・評価を協議することで、自立活動の指導の改善が進めば、幼児児童生徒の変容が現れるだろう。

研究方法

- 「肢体不自由(運動障害)のある生徒等のアセスメント」「姿勢能力発達レベル・評価表」(脳性まひ児の24時間姿勢ケア)の活用
- ビデオによる授業分析を取り入れた実践研究

文献研究 姿勢・運動の発達段階

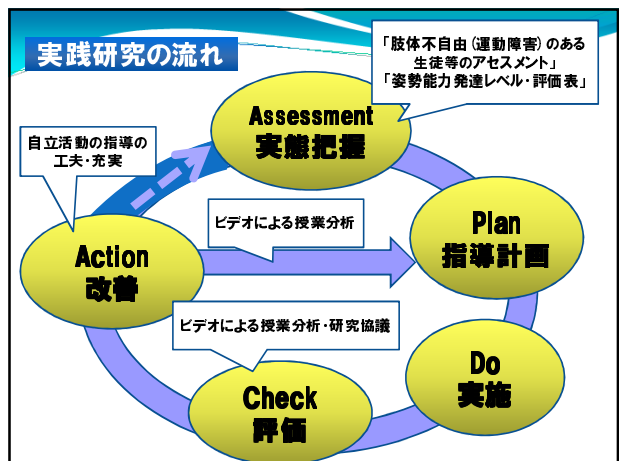
握力 弱 → 可動域 狭い → 上肢の動き 筋力 → 可動域 広い → 握力 強

低 → 高

平衡感覚・バランス機能
視線・頭部コントロール
随意性

運動	寝返り 目の動き・表情	補装具使用での介助移動・自力移動 上半身、上肢、頭部の動き	立ち上がる 腰掛る 上肢の動き	下肢で体重を支える 支え立ち つかまり立ち	平行移動 上下移動
姿勢例	ベッド ストレッチャー	抱きかかえ クッション チェア	車イス・バギー 座位保持椅子 (リクライニングなし) 座位保持椅子 (リクライニングあり)	椅子 ベンチ椅子	立位台 SR CW 手すり 手すり 歩行器 杖
姿勢	仰臥位 腹臥位 側臥位	床上座位(補助一自力) ・長座 ・あぐら座位 ・割座	椅子座位 (補助一自力) (後傾位・中間位・前傾位)	立位 介助	自力 立位 介助 歩行 自力 歩行
姿勢	臥位姿勢	座位姿勢	立位姿勢		

参考文献:脳性まひ児の24時間姿勢ケア 5



実践研究①

アセスメント票に基づいた 幼児児童生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> 急性脳症による体幹機能障害1級 療育手帳(A) 心機能障害1級 主たる姿勢は仰臥位姿勢。身体の動きは困難があり、目や表情筋をわずかに動かす段階。 快・不快の表出はあるが、要求表出は難しい。
目指す幼児児童生徒像	<ul style="list-style-type: none"> 教師からの関わりに対して反応を示す。 期待感や要求を表情や視線で表す。
授業の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 児童が好きなくすり遊びをきっかけにした。 かけ声を統一してくすり遊びを始めた。 聴覚、視覚、触覚にはたらきかける。
成果	<ul style="list-style-type: none"> 児童が見える位置で、複数の感覚に訴えることで反応を示した。
課題	<ul style="list-style-type: none"> その都度丁寧な実態把握を行い、取組に修正をかけていく。

実践研究②

アセスメント票に基づいた 幼児児童生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> 肢体不自由(身体障害者手帳1級：脳性まひによる体幹機能障害)、知的障害(療育手帳(A)) 未定額。仰臥位では、右腕を顔まで上げたり、右足を踏むように動かすことができる。座位での動きは仰臥位に比べると小さく、スイッチ操作などの活動は難しい。
目指す幼児児童生徒像	<ul style="list-style-type: none"> 座位保持椅子に座った状態で、自分の力で腕を動かし、スイッチ操作をすることができる。
授業の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 座位保持椅子に座った状態での姿勢(ヘッドレスト、背もたれ)の確認と調整 腕の直接支持(仰臥位での腕の動きに近付けるため)
成果	<ul style="list-style-type: none"> 手元やおもちゃに視線を合わせて、スイッチ操作をすることができた。 肘から指先の動きを生かして、スイッチ操作をすることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 直接支持をなくしてスイッチ操作ができるよう、肘置きの効果的な使用の検討 体重増加に伴う動きの減少への対応

実践研究③

アセスメント票に基づいた 幼児児童生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> 肢体不自由(脳性まひ：左足内反尖足) 視覚障害(全盲)・知的障害 基本的には机と椅子を使用(椅子座位) 座位姿勢は後傾位で円背。姿勢が不安定であるため手が使いにくい。
目指す幼児児童生徒像	<ul style="list-style-type: none"> 腕をしっかり使って活動することができる生徒
授業の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 短期的な視点：書見台の使用一作業面を体に近付ける。 長期的な視点：足先付近に体重をかける練習など
成果	<ul style="list-style-type: none"> 書見台を使用することで上半身が起き、肘をスムーズに動かすことができるようになった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 重心のとり方や体重移動がスムーズにできるように長期的に練習する必要がある。

実践研究④

アセスメント票に基づいた 幼児児童生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> ダウン症 介助立位、介助歩行 一つの対応が可能
目指す幼児児童生徒像	<ul style="list-style-type: none"> 自力歩行で、行きたいところに安全に行くことができる児童
授業の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 身体のパワーとコントロールをつけるための活動を複数用意した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> 片手をつなく位置を児童の肩の高さにした場合でも、階段を上るときに両下腕を交互に踏み出して上ることができるようになった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 支援を減らした状態で階段を上ることができるようになること。

仮説の検証

発達段階に応じた姿勢・運動の観点を踏まえて目標・指導方法・評価を協議することで、自立活動の指導の改善が進めば、幼児児童生徒の成長の変容が現れるだろう。

成果	<p>発達段階に応じた姿勢・運動の観点を踏まえて、ビデオ分析を行いながら指導を行ったことで幼児児童生徒に変容がみられた。</p>
課題	<ul style="list-style-type: none"> 専門知識を蓄積し、アセスメントの精度を高める。 健康の状態の変化やそれに伴う能力の状態を見極めて、その時の実態に最も適した目標や課題を設定できること。 目標や支援方法を段階的に細かく設定する。

研究のまとめ

今後に向けて

アセスメントとビデオを利用し幼児児童生徒の実態と教師の指導の実際を教師間で広く共有することで指導の方向性をより多くの視点から考え、自立活動の改善・充実を図っていく必要がある。

適切な指導により、幼児児童生徒が本来もっている潜在能力を引き出していくことが重度重複障害児の学びにつながる。